



慶安太平記
五

遠 13
2213
5 止



13 遠
2213
港 止

廣平山家

廣平山家

廣平山家

廣平山家

廣平山家

廣平山家

廣平山家

廣平山家

慶安太平記卷之五目錄

凡搦忠兵捕らるる事

関口牧野安田三人切腹事

正名自害事

足尾村中事

吉田初右衛門事

加茂市右衛門事

令井半兵衛切腹状事

丸橋忠水様向状事

加西市在軍の事妻子様向状事

丸橋加藤吉田様向状事

丸橋ヶ守 様向状事

再々田切腹状事

守名之首様向状事

伊豆守左衛門様向状事

伊豆守左衛門様向状事

一

廣安太平記卷之五

丸揚忠海石捕らるる事



古種石谷の平貝村の人と生捕ら捕らるる者其事始りて
懐ひ勇く忠海の方に向ひる忠海居先ハ市ノ所大長源
也云人乃下屋敷あり首ハ堀溝に門有り内におり引込
居次書年夏四月辛卯七月十日有る時ひひ捕らる
与力都合平余忠海の家の方を圍り子屋敷を門の
費亦とお給し大車とせしめて一度にひきおとりひ自
忠海の方には海人七十八人捕らるる二百の前後に
使ひて中核

飛く鯉の八尾中をせし捕獲のゆゑに大分河をさるる
久板の切也河元よりお捕獲の八尾八すらすすの身の上成りて
八尾の河に流八と記依ると大勢お重り八尾とて捕り其の日に
忠のゆめ房八尾の紙帳に連判帳と包の焼の火とてさく悉く
焼獲り大勢一度に更と目うけし人として女房歩てりる八
真中を走る舟を人おのりし人をも八尾の用心にもゆりて
之く其身を焚きて板河をさるる者お孝と名多しお母お母の
緒まに石谷及乃前に出く流に釣る油おはしお八尾のゆり
御もいとお捕獲と捕る中をさるる八尾をさるるゆりて世に六

風園や 実の伊豆守殿 志願帳に納め其後中をゆめ家と願ふ方に
有金を方八ふあ日十八腰渡お願柳子流に流打る甲 一劍
流十二の馬具上をり其外幕小道具に記いしゆり別石谷
及乃引流の比を水と河のゆりてゆり

実の牧野安田三人切腹の事

ゆめは六右衛門おのりゆめを捕とる事 山中に風園は昔田
三右衛門お中とて大勢お重りゆめゆめ方 趣にゆめゆめと
園ノ捕とる事 志願帳に記いしゆり別依系永山と
趣にゆめゆめと七里の道と記依系永山と

者乃方に夏苗一又中人乃海令丸の以鹿田中を約に隠しを
たむる府中へ集りたむる乃以約に斗へ踏向の何れ致す所と
候立上りぬの或具とて久能山に捕籠りて清野谷津へ年夫
の亦るまゝくおこ出西國舞と踊りて相違乃村別と信持り
のまは有る乃約東向乃往ぬい水とあひらうい平の方に向ひ
留く衆と詠えらるりててて立持りて意田た留め候と見く
何事とて以説有る事とては言員と類子よりいふ乃方に當り
之實乃中へ集有る是余く大を取取るるに言成す事とて
之と古語同義形述はり何れなる事何進を事持て有るといふ

言言書所と見よ、折置り女谷を合持へ食とたり持り、言言と
て打て疑ゆ、ついでに戸あり大を取取る事、はら捕まゝるに持り
ゆ、是頃直下、まゝ先進百歩、河の、まゝ、おる十人の
者、大、中、の、六、持、り、お、進、ゆ、人、の、者、と、集、の、沖、城、と、以、意、一、部、的、小
久能山に捕籠らん、之、持、り、お、進、ゆ、形、も、変、に、郭、名、毒、が、ま、り、来、り
何事、お、ん、い、戸、より、お、お、と、と、馬、井、右、京、進、及、只、今、城、中、へ
此、入、り、其、後、子、を、取、ぬ、い、お、ま、り、ま、い、は、言、言、是、と、同、義、形、大、を
取、ま、る、に、疑、ひ、を、持、た、お、夜、の、事、へ、い、は、戸、踏、向、或、は、新、と
同時、に、燒、立、一、時、に、日、本、と、い、い、入、を、人、を、定、一、お、る、ま、い、今、更

其日と昔に及びる既にそをわすれしにや再伊豆の國に
回る事仰兵衛の者井深親由人等がやかりしに於て其忠
許を擲捕りて守事と定て捕らるるにありし事あり
大久保を以て大にせりて各を益に治政にのりて事也川
せり此上と昔を以て其に及びりて事ありしに既に其用
小平治後抵て圖めりて大少の國入其許にお建捕り此
支度者侍也とて之をとりて力同心半人馬上七騎上下百五
十人等乃其乃彼所に於て秋に干張甚才に馬上に其忠を因
梅屋の方へ走りて其忠を以て其忠を以て大久保七島為忠世に

云一人乃嫡子と云ふ事乃倉中ゆゑ今年七島九歳也 昔時 家康云
信玄と云ふ今我の嫡子と云ふ事乃十四歳なり物許に物を取せし
武田乃人之則梅屋親を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て
入る事あり今知るに使役と云ふ事乃其忠を以て其忠を以て其忠を以て
其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て
中郭告御を捕りて其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て
其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て
其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て
其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て
其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て其忠を以て

魚は遊魚なり可付し取せさるる却て之を食らるるを戒すくま
とよめと渠等廿七と稱し是は一戦一死人の山と築一と
其方分多と出すべし是は使夜に居る我の首を斬る事
之をるる城代に直に命をさすは對面せし人の心儀より
云ふ一語くまに以て扱ひ有まれば是れは死する事
及びは吾れゆに南夷映乃深帷子と爲り上に津偏子其
南黄縷子其野禱赤地乃深乃深の織と爲り甚と
深先はより一員と付取し其地の金海帽子とあり金銀と
教らるる陣力と爲り麻衣に腰と負て座敷の上面に

座敷十人の者共は思ひは甚き事は何も之陣の織と爲り後
左右に座一別對面はしや座敷の合持戸を閉り去る
以後内の子と見ゆは是れは一隊ありき者共
すくまに云はく出ん勢に云はくゆて是れは思ひに云はく
り勝と云はく板と窓靜しや座敷に其の言はく隔と
對面す云はくはし座敷に其の言はくはし座敷に其の
中執折に如し申し某に云はくはし座敷に其の言はく
是れは思ひに云はくはし座敷に其の言はくはし座敷に
すくまに云はくはし座敷に其の言はくはし座敷に其の

百万石乃大なる事云々和へんは見えぬ成りし事と云ふ事あり
瑞も是れ亦所へ受自害は事を見事と云ふ事連地内は生捕
下りし下り有る事小平治後馬上西へと力平治後百人
雑兵三百人とも右京道後日自とも梅屋の方へ向ふ事
正名ハ平治の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
劫を請ふ人合に括て別荘と云ふ事と云ふ事と云ふ事
お終へぬ事の内者も事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
定て昔昔に事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
沿事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

皆因縁の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其後探る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
志事り事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
云義の指事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
与る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其下則 感事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
感事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
住居成雑事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

廓首分詣す、其見吉を東宮系法を東宮に口と首に成て或
成声くくうき海す、意内古徳有井、此幸の双方を海と心
取違て死す、其余も口く、に福のき初買違に於海了
執り、弟属に和回、其無各者十奇、其の侍之、う水胡小
乃んて、ん藤を福知、其立違、う海に生捕を、永く海のもの
和と語、味、回、其、い、色、赤、扶、有、持、消、と、や、く、港、先、に、相、果、の
海、昌、う、り、有、張、之、の、易、所、に、小、平、治、乃、右、京、進、居、大、勢
の、て、押、寄、の、勤、を、東、葉、内、す、ま、の、左、子、自、喜、や、也、右、一、度、に
能、入、ん、や、せ、う、幕、の、正、名、臨、百、探、其、打、回、ノ、板、に、お、引、と

張、筆、の、容易、に、入、事、叶、つ、原、若、口、と、振、て、細、引、と、押、切、り、く、能、入、り
廓、首、の、自、喜、ま、の、る、も、右、一、度、に、捕、も、加、賀、平、内、在、る、か、ら、也
廓、首、中、大、女、す、振、詔、一、平、内、う、あ、張、と、切、筋、す、こ、ハ、叶、つ、と、
捕、も、其、大、勢、一、回、に、お、く、飯、と、廓、首、能、有、持、め、お、初、時、時、小
七、八、人、如、教、く、其、う、捲、つ、我、の、内、り、村、井、中、平、ま、り、の、者、遊、る
廓、首、の、取、と、志、く、う、に、お、廓、首、の、も、口、と、首、今、叶、喚、て、我
前、小、平、治、海、に、下、に、空、野、全、七、港、と、廓、首、の、後、と、案、也、不
人、得、り、や、お、く、の、家、太、口、廓、首、に、切、也、ぬ、ん、り、ん、や、の、か、し、内
安、上、運、八、邊、昌、何、せ、は、は、く、の、家、廓、首、港、と、端、お、て、も、表

鈕に付連て八連八つ丸持眉回と云々うに打ぬくる是れ廓言
決石に向きまて八流持痛みに銀くみどと例も是れ八持助八
流捕も也付也と執り助八つ刀と兼ひ助八つ拍板と卷毛
色也や寝敷一尺深刀と口以唾くう川依に寝費ぬる是れ死り
りの其佛人百業や八目之まりり廓言を人々佛小回ん
八人切敷一も負十文にありり前代事因持事其是れ
守ると初十人の者其死敷と語法に詩一守ると湖金雲持
おと酒有に之傳う流り持之小持室也や深甲用金八
千両小書重二面有るは別其書重持文二日

名忍の書と云言上仕の事

今度好者有る私と秘通し極達上園在期て有るは
奉るお私好者何連天下に都尉て仕謂やと云然天下に
制法之道と上下因新仕多し誰う也然るは持松平
能也書後雖も速く難世と云其誅文お付却る是と
世相人の中成の中忠候持志元後お成多し是編り
天下持兵やも存の私や省の以得夫天下に持以爲に不道に
根元酒井環成もあふ令遠流謀秘や何れ仍留留く
義城仕水旨所り上其上のあやる松持は仕重小元

山崎之報きりる然に勘弁由存ハ水白山崎只海り母々
度有り別与力回心人京都(志)是法司代極倉因防
書留中執きりる某捕手目付子(志)是若信則(志)表
吉田金井(志)捕り(志)昂的(志)其表(志)加存(志)熊谷
逐電廿(志)松(志)中(志)て(志)有(志)其(志)口(志)上(志)の(志)西(志)伊(志)高(志)馬(志)を(志)書(志)と
送(志)り(志)る(志)因(志)坊(志)も(志)海(志)と(志)つ(志)西(志)用(志)之(志)作(志)付(志)送(志)り(志)る(志)中(志)也
夫(志)の(志)勘(志)弁(志)由(志)存(志)内(志)之(志)母(志)の(志)有(志)馬(志)代(志)替(志)小(志)越(志)仁(志)重(志)の(志)後
所(志)人(志)之(志)言(志)金(志)人(志)に(志)り(志)付(志)送(志)法(志)方(志)持(志)合(志)と(志)果(志)中(志)山(志)崎(志)出(志)馬
一(志)送(志)り(志)る(志)金(志)井(志)半(志)年(志)満(志)ハ(志)勘(志)弁(志)共(志)知(志)以(志)強(志)下(志)の(志)持

候(志)と(志)因(志)心(志)山(志)崎(志)只(志)急(志)く(志)高(志)い(志)向(志)れ(志)と(志)見(志)送(志)人(志)救(志)或(志)言(志)人(志)有(志)馬(志)代(志)方(志)
沈(志)末(志)金(志)井(志)只(志)ひ(志)名(志)今(志)比(志)大(志)名(志)存(志)持(志)交(志)代(志)と(志)有(志)今(志)以(志)何(志)事(志)也(志)今(志)
近(志)付(志)候(志)に(志)是(志)と(志)見(志)送(志)南(志)無(志)之(志)送(志)有(志)中(志)八(志)龍(志)以(志)涙(志)と(志)あり(志)一(志)夫(志)先(志)
立(志)高(志)沈(志)末(志)金(志)井(志)大(志)勢(志)き(志)相(志)大(志)命(志)を(志)取(志)候(志)一(志)捕(志)送(志)り(志)る(志)
候(志)り(志)先(志)驛(志)向(志)持(志)送(志)る(志)方(志)持(志)上(志)心(志)え(志)る(志)一(志)是(志)と(志)見(志)送(志)西(志)の(志)振(志)大
成(志)一(志)也(志)其(志)と(志)一(志)野(志)報(志)山(志)越(志)一(志)方(志)方(志)知(志)手(志)成(志)に(志)り(志)吉(志)田(志)初
末(志)の(志)有(志)馬(志)代(志)方(志)持(志)長(志)谷(志)川(志)也(志)末(志)の(志)者(志)持(志)替(志)手(志)大(志)郎(志)
と(志)あ(志)十(志)五(志)歳(志)に(志)成(志)り(志)る(志)双(志)る(志)き(志)其(志)の(志)人(志)初(志)末(志)の(志)彼(志)手(志)大(志)郎(志)也
以(志)来(志)持(志)約(志)と(志)り(志)一(志)海(志)り(志)候(志)報(志)也(志)一(志)り(志)る(志)大(志)命(志)持(志)送(志)り(志)る(志)事(志)也

此の世に假令其業を世に縁ありて然るに我も出世を
能は其方の天賦花賣せんを思ひし事 今又其成る由
其方の将来を見而て死せざる事是のこゝに其の忘執也
さて今生れ給ふに我と攝得まをて洗と渡りあふと縁之
色一りて半九折に同じしむべし假令に相別系せし其亦
若年なるは侍持子やせし何とあはれに懐く未練に
佛て仕りありし縁も加へ及ぶる其の諸仕振捨知
法大に自の縁の供やせんを我あせしに洗杯創系せり
思ひては世に思ふに初まきせきるに同じとお拂し大小

此の世に假令其業を世に縁ありて然るに我も出世を
能は其方の天賦花賣せんを思ひし事 今又其成る由
其方の将来を見而て死せざる事是のこゝに其の忘執也
さて今生れ給ふに我と攝得まをて洗と渡りあふと縁之
色一りて半九折に同じしむべし假令に相別系せし其亦
若年なるは侍持子やせし何とあはれに懐く未練に
佛て仕りありし縁も加へ及ぶる其の諸仕振捨知
法大に自の縁の供やせんを我あせしに洗杯創系せり
思ひては世に思ふに初まきせきるに同じとお拂し大小

傷重なり牛馬を運送すの中山後中勢七千人京都に
与力同心共に都に言入りて捕らむ者を探り六十人
とて河原に居る方々を収め大勢に人あり
禁裏に守護し加者五日初日清香中より女に別席に
清香新造成に汲ひて多揚屋に置け居る方々中より若者
方の多し後清に拘入悉く市を仕出の事令張とて
樂より加者に臨み相尋ね問ひ令と探りおれ
於の白を初と然令る也今言中より樂の如き人
酒物益と傾多辨とるす中山後三年之右也清香と

出市市を六天り此因なる也此酒と進み其後
丁中有一人有馬あり其とき里に習ふ多揚屋にお
座あり也きす我に方に於り金多し此氣をせし通別捕
らむと業のすの捕らむ者中十人令と語りに
思入おきの時刻と侍居り有馬の女諸共二階より小款
之俵縁酒具と流大盆と心市をいにお献進より加者ハ
期共初す置けおるときい大酒物おす清香俵取
枕とて前後とありす辨依り女に集る相尋の色り上等と
屏風持あり探出時刻とありて妙常と引ちハ免

期を業自ずり得たりを捕り此者共十六人二階より渡り
とりあり一兵衛源公市賣の上より押入押入初形
徳を衆に加へるあとも引たる市賣の人得たりや此人を捕へ
明り障子より出せし一源八と云く引付端を大勢二夜に
引く魚と折節近所に刃物あり一飛上り鴨居と云く
高くと喜ひに羅例す當時に五人打撃し半死半生共
者十七人また天井をくちぎる鴨居と云く自由を乞ふ
せんを跟附すと云ふは多物後より市賣の船を引渡井
たゆめ船と云くは是れ西の船を教へたる事と云く揚井

かひくち多量法臺と云く何と云く捕り大市をすするは市賣の
勇りりせんを働かせしは眼をみあさる中割の大勢此上
市賣の首の鴨居と云く上を押入を捕る事やり有る也
市賣の女共事りるは救ふべき事共市賣の日比此時と云くハ
かへりと思ふと報する事有るに時刻に相違はれり事其不
実此に何に云ふ物なる一け女坂に思ふ事と云く食入
神と云く之に識いかに家石仁此者世に有る事有る人
令井半兵衛切腹共事
之を板倉後捕り此者浪人半兵衛捕りて別八兵衛目的

とて尋ねてに武藝を人捕逐るるも其後殺さるる然に
八月二十日天皇寺の前より切腹仕者有り檢使仕者改らば
黒島御持單の儀と云皮と云黒島三重の袷に梶の意
紋付と看し一も胃は花流の御腹捲切其首の御首
捲前一我首は袷と扱ふ刀と云く病を治す一り謀
前代事御持切符也 則書直此又小曰

今度申井の事は皆忠誠謀殺に似し大坂方は
大坂を承りし者とのめいから言ふは上せんえし御
孫府へ執事者成りしと云く又吉田初事つて事せんえ

早速此歸りしに高野に捕まひ來御念に切腹仕者也
け服堂に披露す預めし

慶安四年八月

合井半兵衛政國

世に者同少の御流業は浪人あり
世に然に六月四日江戸におありしと云く
川邊より述江戸入りしときや伊豆吉原にも書
中山屋京都を立寄江左為也 京都より捕者九人
大坂より十八人八月二日に京大坂に御捕者都合
二百八十人なり 書時江戸よりハ神尾書前も存石谷

右道持監版之旨江中と云う大抵用心多し事なく作付是
り

九指忠汗拷問の事

然に松平江是旨版石谷右道持監版者度以詮後持以役也
評定所一以詰あり今日忠汗と拷問者一とあり出さる也
牢書持石出常口初め志先以進之次に九指忠汗を引出さ
今年四月廿五歳淡黄羽二重袴袴と為一混れ之令之引出さ
忠汗才此丈六尺寸類髪黒く髪白く骨何と云ふ海に
一漆あふさ見之に以る其局二間夜隔ち伊豆吉海に對面

可り昔時森友塚持道の毎對面せ一伊豆吉也然に其元
多年持大命時斗す其念以思ふ了し作る忠汗薄く
誅り久々あり四指由信也先以以是時以以勤るさ
珍重に事ある然に我者度收年持大預時斗すかの家
初夜に舟由心中以蒙て事の中より進み伊豆吉海重高
首惡源太義平二平家持為以捕也是武士持男は
是罪に不及也然に我者度詮後持役と作象にありて
了くお尋旨あり以是也色白州有る多物一色毎
詮有る事也其許此州大納言持持四指と有る事

美吾り為り有る一忠臣なり其後親戚謀殺すを
以て中へ渡人集りて之能の純別其意を信じ如
首高大海を極み存せし成り上へ伊豆吉原又吉原の
叔父色の内方連判如と下人々後懐に包み行焼焼火西
焼焼の回て一味決者首高の意に悉白紙を有る色
忠臣をたまき思ひ完承を知る是の難儀に存せし
不肖其忠の由り妻共し小き御那 末期懐懐ひ以上
有るりりる伊豆吉原又作る其元長首我部其二男
其由相承り及りて是く忠臣赤面して改て是く一喜

諾之伊豆吉原又吉原其後集りて其後渡人又大なる者也
中へさる一や有る色忠臣なり凡そ度々大に其く渡人
其も余人や竹造と義と一命にかゝる某其一味せし者有る色
彼おん金物重るく竹造と一命にかゝる白紙はきい焼焼白
余人其事有る色連判如る其色姓名振動を知りて一や
上へ伊豆吉原治く色き色り神妙に白紙有るきに其色
天下乃政治有る色に授奴と有る色尋ぬる色其色忠臣
おし色白紙は焼焼奴と成り才と細粉に碎りて是
彼等が義心と色其色其色白紙は其某奴と成り全

然一の頃其初の如く味持者一人の如く白物せんか
云々其切りの顔色也 其時伊豆も天下に法成る
心は似せぬ是れなる事人々も思ふ也 携向は是れ
以て改まりしに後今度中白物に及大制法は皆き雅
中は伊豆の如く毎に携向に及びり石出帯力携向は
人の如く初一の湯水持素を以り是れは湯水は後
吞せぬと云ふは携向は携向は身目も湯水出る
其若くは登るる 其の常素は素馬海老素
とは物おとす 数日難儀は携向に逢きしは思ふ如く
眼

因高一向の如く是れ八月十二日重く携向有りと
母高の如く携向其中の思ふに入中し物も
おこし四方の固着と云ふは思ふは思ふは思ふは
長流しはたに成る思ふは思ふは思ふは思ふは
責めは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは
しは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは
伊豆も思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは
戴高は思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは
年々伊豆も思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは

伊豆吉原よりくるが家甚しく主人がしく白紙はしりて有り
志は忠小長成是ハ伊豆吉原作其主人の命に誓ふ
義と云ふやあるに争う若衆と云ふ白紙はしりて追比侍と同
日小法と云ふるきに似たり是ハ牛^{サキ}裂金より兼る若衆
は是ハ命持河ん程ハ以責有^トと云ふ其後一云ハ白紙
せきとハ其日持携向止にり

加茂市在妻の事妻を携同持事

同八月十一日市去と云ふ責の日夫一言ハ白紙に及ハ
た是ハ是ハ妻と責^トと云ふ市去と云ふ妻因ふは辰と云

十二歳才母と云ふ五歳之入其に本馬に命せぬ是と妻の兄弟
持子供甚く命泣咽ハ常口進出多汝亦若くハ父に流し
しハ兄弟声と云ふ父上ぬてせぬと云ふ市去と云ふ
好ハ汝未知少成やしハ侍持ふせしと云ふ若くハ志持と
云ふ是ハ其氣色なるより高重と云ふ日ハ汝く妻と云ふ
了と云ふ地と云ふ其の中に火と燒其之に洞持持と
愈々妻と云ふ是上ハ渡と云ふと云ふ妻上ハ女房市去の
向ハ汝流しと云ふ汝流しに云雅き所と見ん分ハ火持中
入ふは世持若と云ふと云ふ汝に火中ハ死入人をす

二人抱き伏せ抱き付是の事ぬれ出へ今も物日事久し
故と隔りに伝へし目之何あらむ物事也 決石持しき
市を奪ふと眼前に是と聞て涙と流し本乃八派令於に碎
る其一を中へる物事と心しに念持し首根下流ぐ一
人を見物す下へ波おとれしりへ三女其回た京
永山は二人とせ白物す是の先白八派の白物西へ上國
を奪せしわが渠の重なりせ又改命市を奪つ白物成
と云其日持素人止しにのぬ亦去國初在るとはるま
素人同くも是た一白あときりか決石素矢が素人

取り初奪の故と云余り苦し心へ白物とは中し
いふ川を右身持者口上と想ひに三毛正道持事と云
只悪口のここのき或は仔人とお流則し端水杯
持仔人を大にあみ十二首持る素人た去國物と云
悪口終り止す一白白物に及むる也

九指加夜吉回携白物事

さき市を奪は白物に及むる事初奪の事久し一毛を白物
有りりりも石谷後持りる事此持る携向の事也
白物せず其の故も母事と携向はし一毛有りるは江戶

作らば其許に在る人等と云ふべし。此に其終日の情を以て
推す所也。會議連判物と云ふ。是は彼を以て携向に及ばず人
彼名実各に備す所也。然るに其連判物と云ふは
披書也。一は是れ我が深き所存ありて事也。大概は立
要者共十人左右。捕りて殺すべし。一は其連判者
漸く中局切上者。今又之を忠告して事也。是れ其者
世に稀にあり。其連判人共万一謀殺すべし。其大何れ其事
ら也。將軍は以て其武徳を以て治るべし。事安んず
亦得ぬ也。大小各其名前收りて連判物に記し、是は

是又此論後上各作譯也。事故なく相誅共中一二年也
二年に穩るべし。然るに却て天下に大乱を成す。一は令
一は其大小各有りて益天下に仁政を以て治るべし。彼亦其見
可ば其恩徳に感ず。各んとて其忠節を勵むるべし。
亦天下泰平に基き、成す。一は忠告。一は其連判人共其
情者共其義に一命を以てする者。其心甲しるべし。何れ也
す。一は其白紙にせん振るべし。其心甲しるべし。其忠告也
携向者事。一は全く天下に其制法を守り、中も。既り市
其心甲す。一は忠告。其母毒と携向。其心甲す。其心甲す。其心甲す。

兵捕り連年の天下は為め此の事なれども今日責て其建
死能に於て一又今度此一乱某一人を裁り改すべし
水戸版権此の相殺を加へる事なれども詮改混乱一
都て天下は終つて一何分穩便に事と改すべしとの
只水戸版権未君事にあつても何万人に及ぶ事なれども
改道只しやまざる事なれども又井伊掃部版権此
以父子共に捕りて事故るく大なる事なれども
柳永此の事掃部版権此の事何と云ふ父子共に
兵捕りたる事なれども此の事なれども天下は

幸福あり徳川家此の事なれども伊豆事後
感涙と流し収むる事なれども石谷版権此の事
忠は母事と携へたる事なれども此の事なれども
初事なれども此の事なれども此の事なれども
表は携へたる事なれども此の事なれども
此の事なれども此の事なれども此の事なれども
今日此の事なれども此の事なれども此の事なれども
此の事なれども此の事なれども此の事なれども
乃士と云ふ事なれども此の事なれども此の事なれども

心素と信守り也 言之人小詞と掃く少之弱りる果也其因之
たりは是ハ非ハ扶向之也蓋る也ハ其弱之也也 右武運是
牛之也ハ侍法に似せざる事 法念也 衣勝教未始能心之
河ハ常口也 臣是言後述中出之旨 石谷乃ハ渡邊之令
概屋ノ川入也 高田古言曰 予約七十歳時 此老人在京十兵衛
永山無其集之名あり 予乃西之出而令其ハ物者去ハ以度
正名志ハ以に然 一方ハ此渡邊也 予之天下此以論政論
才と直き地也 予之志也 我ハ切之丹持家ハ其ハ自害
此事也 雜成の自投書は是則切之丹持家也 持家ナリ

石谷及是と圓之 神州持守之は所定ナリ上之也 則之入に況也
然らず 掃く也 是ざるのハ自投書也 合と物と是之也 我ハ其
名高也 此ハ渡人ナリ 人慧ハ牢也 入之也 是石谷及
此講也 中圓ハ多又曰 古ハ麻布七ハ場持也 是に時物何者
是之也 是ハ十一人自害也 是ハ中ノハ一則ハ其也 目的ハ
一ハ吟味有に付也 是ハ一則ハ浪也 中ノハ一人群也 此ハ一也
新に是也 是ハ其者何リ 是と見ル也

三十五年 詠長 如何 千歳 松色 托
噴吐 諒より 先に 消系 牙 此 波 舟より 是と 教 丸 貝より 正 後

中よりいけ為れ大命をなく成るを敵に捕まはり初集をた
有る事あるをいふす死とてにせざる事ある念ひ事あり
其後強敵を討ちて守るに切腹と聞ゆ又も敵を討ちて
今も之れ期に及ばずとて死せしむるをいふ
命と思ひ今日迄ある事ありかあるに相と今生るもの
ある事ありと後悔ありとすことあり心中を行簡に
忠に酒と進みしる友格酒と流しか家財を
射由也此をいふあり保本殿中より其義と信
とて今一度射由と信ひしに諫は其情と重んじ子奉

万苦と凌辱する物とありし事今も其恨ひをいふ
越方其物終と改し其國に別れに嘆ひしる事重
今生に候事今日に死と曰ひし事永く其
了しとて忠に死に別れをいふ一札と述別之れ期に
所と見ありし事今も其恨ひをいふ事ありし事
押立御多し八方に別れをいふ事ありし事
野々為と乱し事ありし事ありし事ありし事
左右に立向ひ念佛せよとて其の心忘る事ありし事
雲水持行清之為れ事ありし事ありし事

と云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
何と云はれずと云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
是は又靜に目と心

頼むひひのめか道と云はれず

と云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
南氣は有るありと云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
名はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
忘るれむと云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
者也 南士はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり

さういふ忠はうたは期はとくるん中ゆと云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
市はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
中ゆと云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
目と心と云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
いらすうと云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
有依と云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
之れはうたは期と云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
了は頼むと云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり
必悔のふかきと云はれずたは港右は肩先近寄るく見物に法人あり

十言を講う才持う人に多く其許は義と成す所ある我亦
流の多命と拙め定指を論する義と見てせざるに南を
や早疾く有るか其言回を眼に河とらぬるの集り
武士其拙と相果すや其末代の面目をいふ大時別極ま
ばまは河の多命を流と拙め後十文字に抄如其口とれ
首(忽)とせし首とかき流せば三百斗をせざる見ぬ其
万人一日に多命を河と成すや其まは成勢中流りて
後百田十言を流せば流と伊豆も流(悲)りて古に成
るる言回うて其義者ハ吾共情譲也之行者易くす

又其許は義人の才のといふ武と武にまざる志強に天は其
や我才志は川出ぬことありは流は口とる田に下けく
中前其才ハ伊豆も才は上いふことありてとありは別
之とありてハ神威ありあ別る田に百斗石は流と
此下初合之古にり成下四指以小作付とせしに流と
高りまじりあ万人の物と一人也

心ある首極のに烈くも
然に駒井右系進海は付除府に是面りてあ別正者と
たどめ十人其首と拙のに忽と系流た如田弁弁

皇法府より事つと名青堀垣に於て十人傑に於ける中事つ
又ありしが、白のまらひ女持事なまは、神代也、然に助井屋
長命改にのめらるるが中、切後にあるる東山酒造り
若くは二年のふるを意と、何れ其後、以て也、は、高宮博野
伝史、以て事、人、代、凡、一、簿、倉、子、の、り、こ、は、事、と、因、り、大、小
歌き、早、速、に、予、人、の、出、評、定、所、之、所、出、る、ハ、私、事、人、の、事、を
ある、其、時、大、意、と、文、の、意、ハ、體、體、と、り、更、果、度、に、私、事、り
彼、未、公、事、あり、上、因、に、ま、せ、一、者、る、ま、ハ、別、事、然、り、の、り、之、體、の、
也、然、其、別、造、と、り、ま、せ、ハ、為人、急、き、後、多、く、事、く、ま、り、也、

は、事、と、り、る、結、事、ハ、一、度、高、木、に、似、る、事、あり、ま、り、七、百、十、一、
一、一、其、後、と、り、や、也、一、人、代、り、る、七、百、十、一、事、不、用、持
首、と、持、事、ハ、何、と、い、ふ、事、ハ、一、事、肆、事、と、似、り、也、一、に、似、ひ
中、より、也、ま、り、ま、り、ま、り、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、
の、白、の、り、事、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、
二、百、目、の、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、
諸、向、其、善、程、院、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、
所、為、所、以、高、と、流、ひ、也、也、と、言、ひ、ら、る、其、後、の、曆、二、年、
女、代、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、ハ、一、事、也、

正名に出入し生る者大切版式は遠隔傳書と一いふて大權
少あり事略をくしんくは海人たるが如く此類物にありて重く
いふ事あるの尤正名をたぬ物此類物に在るを信するもの
以事有りて似せざる也則似せしむる書主と流ありしに
しる事あるもの尤正名をたぬ物此類物に在るを信するもの
尤に類宣す文字なるもの中篇と一畫のきり是正名が梅
より又兼て此類物に謀教あり出那の梅に在るもの
は事一なるに在る中評定匠とや一是は伊豆吉原
別名丹後と云ふ者と云れしるに彼類と見せしむる丹後

と見せしむる者細言の事一は伊豆吉原傳書に計判
何事か記述ししるもの此の事一丹後と云ふ物此類物
此類物に記述ししるもの此類物に記述ししるもの此類物
別其者と加判ししる物此類物に記述ししるもの此類物
中一は伊豆吉原傳書に記述ししるもの此類物に記述ししるもの
作しし別其類物と云ふもの此類物に記述ししるもの此類物
由井正名記述ししるもの此類物に記述ししるもの此類物
此類物に記述ししるもの此類物に記述ししるもの此類物
是より亦兼て種ありしは彼最古文字記述の事一は存ししる物

正者忘れゆべき者として頼りたは是全波ホグの流とも信りた
 之保は保津の道沿波中にも事未 天下は天は是は以て
 水戸藩ハ福^海ニシテ 未^海ニ年若にけり 七十九 留^海の天下は其の
 此度此の礼意其入に以て成りて相及と少くも事ハ
 沿波混れく却る天下は沿波初成りて中慮の^海訓景
 河邊程便に沿るは海に水戸藩は其智謀之の老平此未
 是心で進み事実に天下は枝板と成りて徳川は幸福百代
 其易に其軍家有人中奉のいし 是 実るも其成長は後
 水戸藩のやりもり 天下は其買文と信りてのよけ四方の事

伊豆の版図が指し 海人者 伊豆の版図

然に一礼意に沿りて六の一家は伊豆を以て伊豆を版図と
 して度は沿波の道沿波の中 海は自分其働にありて
 少の版図も是意者なり 是を其軍 未^海ニ年若にけり 一家は相
 法は心相も事あるは 未^海ニ年若にけり 其石は其指
 此は旨作有るは 伊豆の海溝の法有り 其海は其
 是の^海に礼作も事あり 是の海人の者たは是先奥村分
 其の^海に音石の海に其版図代り 其版図は其版図の也 沿に
 其師友の^海に其版図は其版図の也 其版図は其版図の也

長谷川中流に二百里ありて大坂に到りては作れども天候
亦的なる所なりしを以て其外に海人は悉く
以て獲りては其海酒井澄俊を佐作するに處るに海人は
隙を争ひては其謀略を令るに然らば海人は其出放
者なりと云也 伊豆守海軍の作の理をせし人に入ら
日切法大なる事ありしと云はれ有るに海人は其類を
其の如くにしては然るに海人は其出放者なりと云はれ其
人より其出放者なりと云はれ又云はれ其出放
る者世に傳へられしに海人は其出放者なりと云はれ

松平の河が天下にありて 泰平成りては伊豆守海軍に大坂に
少納言の多海人の出放者なりと云はれ其出放者なりと云はれ
伊豆守海軍に仁徳と慕ひ澄俊を佐作するに處るに海人は
其出放者なりと云はれ 天下泰平の如くは實に賢君代と保ち賢臣と
補佐 其出放者なりと云はれ 十日其出放者なりと云はれ 海
波靜かにありて威を初るに海人は其出放者なりと云はれ

追加

高皇太子紀卷第一の内に入らざる所の物も古くは事
因と云ふ程に平に事同の如く年月も未だ事同の如く記す

高皇太子紀に大國に事同と見え、い昔時比獻し
身盛は師や、百所の有給い高皇太子の我子に家
と云ふは佛事抄に取入る事未だ之を無難と云ふは
酒心持は事同の事と深敷見や我子と曲にあまの
之に記す、夫天下國事持之や成る事無難と云ふは
振首、徳深志及び、廣大せ也此切徳出家持之と

度古の事同に記す、是を佛事抄に取入る事未だ之を無難と云ふは
高皇太子紀に事同と見え、い昔時比獻し
身盛は師や、百所の有給い高皇太子の我子に家
と云ふは佛事抄に取入る事未だ之を無難と云ふは
酒心持は事同の事と深敷見や我子と曲にあまの
之に記す、夫天下國事持之や成る事無難と云ふは
振首、徳深志及び、廣大せ也此切徳出家持之と

深あるまの澤り此の敵の地に出のりたぬと承り申
 足濱村國のりもその部中村村屋のあは還宿をたは物や居
 りの其子の南國村領の武成法をたは義連に仕へ中村多野
 なるものや名あたるたは名をいふ子母有くは流るがやあり
 又中村村屋に川荒首持とよき大成中一せと送りり其
 りも中村村屋に在りしはつる部中家も其り又今にたは流る
 耕師との業をすくなく年月とよきものたは其に持所中納言
 こそ一ノ部に成申のや足濱國へ流るものしやんするべき
 雲井と人と送りありに詠ありの包に部は流るは格り

月と重祿年と流るあ唯ののこもなきいひありたはうち中納言
 とよきそのSKもた部中村屋に在りしやぬなるか海士に
 遠く劇のいしをいひり一人にたは子を依りし其時持所中納言
 坂八部へたよきものしにたはつるもの持所の中におひるま
 思も流るき整りとおたはあ都馬のいひ中納言の事
 よるいなるまがはるるの御きも書に日と送り流る水のや
 かのあはし里の者たは計しに中村村屋のいへるたり那
 男子入女子入とを依り男子は知名日と送り取にたは
 来去と送りせりたは初子にたは事や 傳女子は九州流る

し村河郎やうの者持妻やをまうけし河郎梅の二好武義
号一入道一々之位は師一師とてり河郎梅の重なる
礼を世とまうけし一書一の一々一なる一入知子と
其言一也一其言一也一其言一也一其言一也一其言一也一
と河郎梅信長持日河郎梅の河郎梅の者一古郎梅の
中村村里に居り一と河郎梅の河郎梅の者一古郎梅の
相知る者一也一其言一也一其言一也一其言一也一其言一也一
今河郎梅の妻一也一其言一也一其言一也一其言一也一其言一也一
言一也一其言一也一其言一也一其言一也一其言一也一

又女子と男子とを依りて女子は其後に 東宮持は其言
る也のひ南の院者一は是也男子知子と小梅とに
大和太納言長脚や一ハ其人也其言一也其言一也其言一也
こやる也のひ一其言一也其言一也其言一也其言一也其言一也
物や一也一其言一也其言一也其言一也其言一也其言一也
信長に依りて其言一也其言一也其言一也其言一也其言一也
深く其言一也其言一也其言一也其言一也其言一也其言一也
其言一也其言一也其言一也其言一也其言一也其言一也
一信長と其言一也其言一也其言一也其言一也其言一也其言一也

高麗にありてその如く谷中村に傳へしきくもや一
高麗にありてその如く日と送りし如く夫も高麗を
治せり一我に的智と云ふ一干附心去に回めり夫も
磨き治りし事一水持りし如くはくも一おんを
天り治りて成天正十一年後と位持ち物に付り一天正十一年
の春に三位内大臣に昇り一其年秋國白威に成せり
天正十四年天子の性天子の性と有り世に於ける事九也一天正九年に
東の去りて中田陣一永禄九年一高麗海軍長入年一
小別初年一四年一信長國を去る事如來京入の二年

秀吉の如き四年豊後大の陣中宗公曰書年一
陣一曰七年一京大也大曰十一年一江戸橋築曰十一年
橋河村市橋築曰七年一二年曰口角する曰出島曰
十五年一尾張村に橋築し其如くは橋築也云云

圖書

寛永此比に乃其高も一乃其高も一乃其高も
追に橋築也一其高も一乃其高も一乃其高も
決りり白折一乃其高も一乃其高も一乃其高も

童僕十の口上最入らるる由と聞ふ何とるく候じ
し方のらる者共の由や。お共の使え〜
松下馳走〜 松下書に等りあるの程に付く
源平又なる大喧嘩〜 と云ふ序に道ある御供の
圓一得りと信〜とや 謙に言ふ御供は之年一^〇童僕
事す〜の口上は成る事候候や〜^〇守る中々御供
と云ふは人共の身次第と御川の由らぢと
づき事や 候し〜か候ふ人共は腹中の徳とん
お千人共の身次第の御供と候〜 仁義に

お〜と〜
御す〜方寸共信の里共御供の師は
又侍を控死にらじ副 謀者共活物と候
し〜事 守る人共共〜
事〜是の妙御供の者人共御供は主侍の由と聞
茶吞咽共候め〜今夜に書かす

慶安七年 記 終

Handwritten text in a cursive script, possibly a historical record or account. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page. The ink is dark and the handwriting is fluid and somewhat dense.

Handwritten text in a cursive script, located in the lower right quadrant of the page. It appears to be a signature or a specific entry, consisting of about three lines of text.

Small handwritten mark or characters, possibly a date or a reference number, located in the lower left area of the page.

天保九年戊辰月

村瀬氏

